法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

長屋王家木簡にみる土地経営をめぐって ： 付 長屋王家木簡関連論著目録(稿)

OGUCHI, Masashi / 小口, 雅史

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 人文科学編
(巻 / Volume)
104
(開始ページ / Start Page)
69
(終了ページ / End Page)
94
(発行年 / Year)
1998-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004622

Hosei University Repository

長屋王家木簡にみる土地経営をめぐって

——付　長屋王家木簡関連論著目録（稿）——

小口雅史

はじめに

一九八六年から足掛け四年にわたって実施された「長屋王邸」の発掘調査は、八世紀前期における奈良朝政治史の中心的人物の一人である長屋王について、膨大な数にのぼる木簡という同時代史料を、我々に提供することとなった。長屋王については、それまで『続日本紀』のような編纂物を中心とした、きわめて限られた史料しか存在しなかったわけであるが、これによって、長屋王自身の日常生活まで窺い知り得るようになったわけで、学界はもとより、広く世間の注目を集めることになったわけである。

筆者も、その概要が『平城宮発掘調査出土木簡概報（二十一）—長屋王家木簡一』（奈良国立文化財研究所、一九八九年五月）として公表された直後の古代土地制度史研究会（通称。旧彌永研）にて、「『長屋親王』の背景」（一九八九年五月二十七日、於仏青会）・「長屋王家木簡における交易—付、御田と御薗」（同七月三十一日、於お茶の水女大）と二度にわたって関連史料や考察結果をレジュメにして配布していたが、昨年、幸いにもこの問題についてさらに研究を進めるための学内特別研究助成金の交付を得ることができた。

Hosei University Repository

そこで筆者にとってとくに関心の深い、長屋王家の土地経営の問題に的を絞って、研究の現状をここにまとめてみようと思う。

というのは、既に多くの先学によって指摘されているように、この木簡群から知られる長屋王家の経済生活には、律令の公的規定のみからではけっして窺い知ることのできない、私的な側面が色濃くあらわれており、当時の貴族の経済基盤の実像が映し出されている可能性が高いからである。

そのことは、長屋王家で経営されていた土地に対して、それまで当該時代の研究ではまず使用されなかったであろう「領地」「所領」といった用語が付されていることにもよくあらわれている（鬼頭129―63、森222―363 394、鬼頭249―161他[1]）。

これはまた、やはり残存史料が少ない大化前代のミヤケやミタの経営を理解するための参考史料としても重要な位置を占めるであろう（館野143―191）。

一　長屋王家の土地経営

木簡から窺える、畿内とその周辺における長屋王家の経済基盤は、次頁の表に掲げた通りである。畿外のものについては、項をあらためて後に検討する。

a　所在地

現地比定については、現存地名との類似性を中心に、その他種々の見地からなされているが、現時点では確説を得がたいものがあると言わざるをえない。

① 宇太については大和の宇陀とみるのが通例のようであるが、珍努宮との関連で、和泉国に求める説がある（大山170―93）。

Hosei University Repository

表　木簡にみえる畿内周辺の長屋王家の経済基盤

経済基盤	管理機構等	推定所在地	備　　考
①宇太御□		奈良県宇陀郡／大阪府泉南市兎田	仕丁・厮
②片岡（御薗ヵ）	片岡司	奈良県北葛城郡王子町・香芝市	御薗(将)作人・持人・持丁
③木上（御田ヵ）	木上司 木上御馬司	奈良県北葛城郡広陵町／同橿原市／同高市郡明日香村木部	持人？
④佐保（御薗ヵ）		奈良県奈良市	
⑤広瀬		奈良県北葛城郡広陵町	
⑥耳梨(无)御田	耳梨御田司	奈良県橿原市	
⑦矢口（御薗ヵ）	矢口司	奈良県橿原市／同大和郡山市	
⑧大庭御薗		大阪府守口市大庭町／同堺市大庭寺	
⑨渋川御田		大阪府八尾市渋川町	奴
⑩高安御田	高安御田司	大阪府八尾市高安	
⑪山背御田・御薗	山背御薗司	大阪府南河内郡河南町山城／京都府	奴婢・雇人・御田芸人
⑫狛御田	狛御田司	京都府相楽郡山城町	
⑬山口御田	山口御田司	不明	作人
⑭都祁氷室	都祁司 都祁宮	奈良県天理市・山辺郡都祁村	帳内・雇人
⑮丹波杣		京都府中部・兵庫県北部	帳内
⑯山処		不明	塩殿・雇人
⑰炭焼処		不明	

※渡辺114，館野143・162，大山170，森222等によって作成した。
※大山170では，珍努宮についても氷高内親王家の所領と有機的に結びついた長屋王家の所領であるとしている。

Hosei University Repository

② 片岡は聖徳太子ゆかりの著名な地で、問題はない。

③ 木上については、高市皇子の殯宮が営まれた木（城）上宮と関連づけられているが、その具体的比定地については諸説ある（表※の他、福原137・岩本166等も参照）。

④ 佐保は、懐風藻や万葉集にみえる、長屋王の佐保宅の地とみられ、これには異論がない。

⑦ 矢口は、現存地名から大和郡山市に比定する説があるが、それが古代にまでさかのぼる明証はなく、天武元年七月癸巳紀にみえる八口と関連づけて、香具山付近とする説が有力である（館野162―115）。

⑧ 大庭については、いずれも『行基年譜』を根拠とする守口市大庭町と堺市大庭寺との二説があり、確説はないが、後者は①宇太と同様、珍努宮との関連を重視するものである（大山170―93）。

⑪ 山背については、当初、山背国とされていたが、ここだけ広域地名であるというのはやや不審であり、山代忌寸真作墓誌や正倉院丹裏文書などにより、河内国石川郡山代郷とする説が有力である（館野162―113、森222―394、鬼頭249―152等）。

このように比定してくると、まだ確説ではないものもあるにしろ、②片岡・③木上・④佐保・⑥耳梨・⑦矢口といった大和国関係の所領の他に、⑧大庭・⑨渋川・⑩高安・⑪山背といった河内国関係の所領の比重の高さが際立ってくる。これは大伴氏・物部氏・蘇我氏といったヤマト王権の豪族たちの財産形成に類似しており、それらと同様の系譜を引くものと理解されている（森222―394）。

b 所領の所属

長屋王邸には、長屋王の他に、その正夫人である吉備内親王もおり、時にはそこに吉備内親王の姉（カ）である氷高内親王（後の元正天皇）も幸ずることがあった。この三人はそれぞれいずれも独立した家政機関を所有しているので、出土した木簡には、これら三者の家政機関に関するものが混在している可能性がある。

木簡にみえる家政機関の構成員の分類からは二系統の家政機関があったことが確認されるが、それぞれの本主が

Hosei University Repository

誰であるかについては見解が分れるところであり、またこれまでの長屋王家木簡研究の一つの重要な論点であった。[2]

前項でみた各所領がいずれに所属するものであるかについては、この家政機関の本主の問題にも関わるわけであるが、いずれにしろ家政機関の融合が早くから指摘されており、所領の所属についても本主を分別するのは不可能な（あるいは必要ない）状況である。

⑪山背については、その関連木簡に、扶・大書吏・少書吏がみえることから、二系統の家政機関のうち本主の位階の高い方との関係がみてとれるので、かつてはこれを吉備内親王家に所属するものと説かれることが多かった（森115―101、渡辺116―103、館野143―195他）。[3]

しかし、二つの家政機関をいずれも長屋王家のものとみる立場からはこうした区別は意味がない。また二つの家政機関の本主を別とみても、木簡からは両者の明確な区別ができず、長屋王家全体として資産を管理・運用していたとみざるをえないようである（森115―101、渡辺116―103）。

c　所領の経営

前表に明らかなように、所領毎に現地に御田司・御薗司といった担当の役所がおかれ、そこには長屋王家から派遣された責任者がいたようである。邸内の務所がそれを統轄していた。邸内の機関と邸外の機関との間ではそれぞれ人事異動もみられ、所領は、一応、長屋王家から派遣された職員の直接の管理下にあったとみることができる（森113―101、渡辺114―103、館野143―195）。

御田と御薗については、御田から蔬菜を進上している例があり、実態として一体であったらしい（鬼頭157―129）。令の「園」の定義にこだわる学説もあるが（角林136）、それはあまり意味がないように思われる。[4]

木簡から知られる労働力については、食料や功の支給による、農民の「作人」「佃人」としての雇用（「雇人」）が中心のようである。②片岡では「御薗作人功」、⑪山背では、一日あたり一升の食料の支給や、「佃人功」がみえ、また⑬山口では「作人食米」がみえる（渡辺114―103、館野143―196他）。

Hosei University Repository

務所との連絡・運送等は丁と奴婢によって行なわれていたようであるが、丁は封戸の仕丁かと推測されている。奴婢は御田等での生産労働には従事していた形跡がなく、家内奴隷的なものであったらしい（鬼頭157―129133）。またこうした経営方式を、倭屯田と類似しているとする評価もある（館野143―216）。

こうした側面から、長屋王家の所領経営は、労働者に功や食料を支給して、収穫物はすべて徴収するような直接経営と表現されるのが普通である（渡辺114―103、森222―394395等）。

しかし、史料的には僅かなものの、営料投下の直営方式だけではなく、賃租のような請負方式の存在も推測できる（澤田245―535）。[5] この点は、今後さらに検討する必要があろう。

もう一つ、これに関連して左掲の木簡も気になるものである。

・当月廿一日御田苅竟大御飯米倉古稲

・移依而不得収故卿等急下坐宜[6]

この読みや解釈についてはともかくとして、長屋王家に関わる古稲が移動していることは確かである。その意味については、財産運用であることが推測されているが（渡辺114―103）、貯蔵された稲であることから、あるいは出挙のため、ないし次期営料頒下のためであった可能性もあろう。

ここでは稲と米が区別されているようにみえるが、すぐに「大御飯米」となるところの稲を苅ったの意味であろう。とりあえず稲の状態で倉に納めるのか、舂米したものを倉に納めるのかさだかでないが、米になっていれば、倉が一杯であるというのは深刻な事態であろう。

d　施設と開発

これらの所領には、経営担当者が詰める現地機関の建物や、倉や塩殿と呼ばれる収納施設があった（館野143―196他）。③木上からも米が送られてきており、そこにも倉や御田があった可能性が高いが、そこにはまた御馬司もあった。後述するように高市皇子と関わる重要な場所であるだけに、施設も大きかったようである（渡辺114―103）。

Hosei University Repository

こうした在り方については、大化前代のミヤケとの関係にも注目されている。またミヤケからも蔬菜が献上されることがあった（館野143―196 215）。

また木簡の中には、墾田開発を推測させるものもあり（澤田245―525）、拠点の周辺の開発をも推し進めていた可能性も高い。

e　所領の由来

こうした所領が、長屋王家の私的なものなのか、位田・職田のような国家的給付の一部なのかについては、断定するだけの史料はない。[7] ⑪山背については一〇町と区切りがいいので位田とも解釈でき、また⑥耳梨周辺には他の貴族の位田の存在が確認できるから、そこから類推して位田とみることもできよう（渡辺114―103 104）。また畿内とその周辺から長屋王家に送られた荷札に特徴的にみられる一石単位のものについて、それを位田・職田からのものとする見解も有力である（鬼頭157―137。また渡辺116―105、森222―397参照）。

しかし、木簡にみえる田数は、長屋王とその周辺の人物の位田・職田を合計したものを越える可能性が高く、さらに御田・御薗に固有名詞が付せられていることから、位田・職田ではない可能性も高い。また畿内には封戸は存在しないという見解もあって、これらの所領が封戸に関係するという可能性も低い（寺崎199、鬼頭157、森222―395）。つまり律令的給付の中では考えにくいものなのである。また前述したように、私墾田の存在もまず間違いのないところである。またやはり前述したように、所領の分布が、ヤマト王権の豪族たちの財産形成に類似しているということからすれば、それらと同様の古い系譜を引く可能性を十分検討する必要があろう。

その際、注目されてきたのが、長屋王の父高市皇子の所領との関係である（福原137、館野143―195、鬼頭157―131、岩本166、森222―395、鬼頭249―152他）。

高市皇子の殯宮の営まれた③木上については前述したが、その木上に近接して存在するのが②片岡である。片岡司に属する持丁に木部足人・木部百嶋がいるが、その木部を木上とみる説もある（岩本166）。[8] もっともこれに対し

Hosei University Repository

ては、木部を紀氏の部民に由来するとする説もある（澤田245―523）。いずれにしろ、前述したように片岡は聖徳太子ゆかりの地でもあり、また茅渟王の墓の所在地でもあるから（鬼頭157―132）、天皇家と関係の深い地であることは確かである。

また⑥耳梨・⑦矢口はいずれも高市皇子の香具山之宮に近接している。⑥耳梨は推古の耳梨宮、あるいは耳無ミヤケとも関係している地である（鬼頭157―131）。

こうしてみると大和の南部に存した所領はいずれも高市皇子と関わりの深い地であり（森222―395）、また天皇家にとっても重要な地であった。長屋王家の財産形成に高市皇子の影響が大きかったことは間違いなかろう。

f　田・薗以外の所領

前表⑭以下がこれにあたる。またその他、乳牛がいることや（渡辺114―103）、③木上の御馬司の存在から（鬼頭157―131）、牧の存在も推定されている。

その経営の詳細は明らかではないが、⑭都祁氷室については功食支給の直接経営が（森222―394）、⑮丹波杣については帳内派遣の直接経営（渡辺114―102）が指摘されている。⑭都祁氷室は律令制以前からの系譜を引く可能性が高く（森113―79）、天皇家以外ではまれな、長屋王家の私的所有であった（渡辺114―104）。

g　地方の経済基盤

長屋王家木簡の中には、多数の地方からの荷札木簡が含まれるが、その性格の判断は難しい。一応封戸とする説が有力のようであるが（渡辺114―105、鬼頭157―136、森222―397他）、遠隔地にある間接経営による私的所領とみる見解もある（大山170―117）。

封戸とみる場合、荷札木簡の中には氷高内親王・北宮・長屋王を宛先に記すものがあり、そのことから直接封主へ送付された可能性がある（渡辺114―105106）。またさらに敷衍して封戸の直接経営を主張することも可能であるが

Hosei University Repository

（森222―398～400）、封戸の場合は原則として民部省勘会が必要であるという立場から、里（郷）段階であらかじめ封主の名前が記されたにすぎないという慎重な見方もある（大山170―114）。ただしその場合でも、封戸租交易物についての封主への直送は認めている。

もし直接経営が認められるとすれば、そこに公的給付地との強い結びつきが見出せるわけで（渡辺114―106）、これは大変興味深い問題となる。

こうした地方の経済基盤については、その運営に携わった税司の存在も注目される。税司が国司の属僚なのか、長屋王家から派遣されたものなのか、在地の有力者なのか、見解は分れるが（松原57、渡辺114―106、角林136―7以下、大山170―37以下、森222―106以下等）、これも難しい問題で決め手はない（鬼頭157―140）。

諸説の中では角林136の説がやや特異で、確立した制度ではなく、徴税や稲の保管・運用を行なっていた在地有力者や中央から派遣された者を、便宜的にそう呼んでいたにすぎないという。また税司は特定の有力者のためだけに存在するのではなく、複数の有力者の担当を掛け持ちしているともいう。さらに税司に「国」の文字がないので大宝令以前にさかのぼる制度であるというが、「国」字の有無は、史料の増加で意味がなくなった（森222―398）。

また税司の職務範囲についても意見が分れ、「税」を従来の見解にそって出挙に限定して考え、出挙稲の運用の範囲にとどまるとみるかどうかが問題となる（大山170―38他）。これについても決め手はないが、出挙稲の運用はかなり広範囲にわたる可能性もあり、それほど本質的な問題ではないかもしれない。(9)

二　従来の初期荘園論の立場から

前章でみたような長屋王家の経済基盤を、従来研究されてきた所謂「初期荘園」研究の論点と比較してみるとどのようなことが言えるであろうか。

長屋王家の畿外のそれについては、前述したように封戸とみる見解が有力で、所領については畿内に限定されて

Hosei University Repository

いるという主張が今のところ可能性として高いようなので（鬼頭157―141、金子242―30114、澤田245―537他）、ここでは一応、この立場から考えてみることとする。

初期荘園の類型論については、かつて藤間生大氏の議論を踏まえた上で、畿内型・北陸型といった概念を検討したことがある。[12] そこでは、地域による在地首長制の貫徹の度合いに応じて、荘園経営の在り方に違いがみられることを論じた。すなわち、在地首長制の貫徹していた北陸地方では在地首長制を媒介にした経営が、在地首長制による地域掌握がむずかしい畿内及びその周辺地域では荘園経営者による直営の度合いが強まるとしたのである。

この点について、長屋王家木簡の世界からみると、畿内に基盤としての直轄地を持ち、畿外を含めた広がりの中に封戸という隷属民を公的に付与されるという構造（鬼頭157―141）が、この問題に関わってくる。また畿外に存した中央豪族の田庄（ヤケ）は、封戸制という領有形態に換骨奪胎されてなくなり、畿内の田庄だけがなお中央豪族の直営的拠点として残されたという見解（澤田245―535）も同様のものであろう。

先の初期荘園の類型論については、地域差ではなく時期差である可能性もあるが、こうしたことを踏まえると、地域差を重視する方が理解しやすくなるように思われる。

畿内の土地経営については、近年、澤田氏が従来よりも踏込んだ試論を展開している（澤田245）。それによれば、庄と墾田地などの組合せからなる所領経営が七世紀以来相承されながら派生しており、それは藤原氏・大伴氏・長屋王等に共通するものだという。これはまた、藤原的と大伴的という古典的な学説[1]に対する批判ともなっている。

しかしながらこの点についてはなお検討すべき問題が多かろう。やはり律令制の進展による変化については無視できないのではないか。律令制が本格化する前に得ていた経済基盤と、律令制が本格化してから得た経済基盤とは質的に違いが生じたのではないか。例えば研究史的には初期荘園を代表する寺領についても、古くからの基盤をもつ法隆寺や大安寺と、新興寺院である東大寺とは、その寺領の性格にはかなりの違いがみられる。藤原氏についても、所領の性格において、他の豪族とは違った側面を見出せるように思われる。

律令制前後という観点からすれば、むしろこうした古くからの経済基盤と律令的俸禄との関係が重要になろう。

Hosei University Repository

律令制の成立は、それまでの伝統的な直轄地に加えて、莫大な律令的俸禄が得ることを可能にしたのである（鬼頭157―144）。従来、こうした二つのパイプといった観点は、摂関期における藤原氏について述べられることが多かったが[12]、これは律令制成立期までさかのぼらせるべき問題であろう。長屋王家木簡の発見によって、中央貴族の律令制初期における具体的経営方式が明らかになりつつあることは、こうした点から言っても重要なことなのである。

三　安都雄足の経済活動との比較

やはり八世紀における具体的な経済活動が分かる事例としては、長屋王の時代よりは下るが、八世紀中期における安都雄足の場合がある[13]。

安都雄足の活発な経済活動については、彼が生きた天平という「巨大な消費」の時代によるものと考えられているが、その手法には、長屋王家の経済活動にみられるような、前代以来のものを利用しているとも言えるものがある。例えば、経営における人的結合の利用が挙げられる。雄足の場合、自身の赴任地を中心とした人的結合を利用していたが、長屋王家やそれ以前の中央豪族の経済活動においても、すでに、現地における機関を利用した、そこに居住する人々との人的結合を活用している（福原137―22、澤田245―523等）。

また長屋王家の周辺には、各種の専門的な技術者が存在したことが知られているが（森113―102）、雄足周辺にも、例えば専門の輸送業者が存在していた。

長屋王家では蔬菜やその他を利用しての盛んな交易活動が推測されているが（角林136―7他）、雄足も各地で様々なものの交易を利用して大きな利益をあげている。

田地経営についてみてみると、前述したように長屋王家木簡には賃租のための買田活動を示す可能性が高いものがあったが、これは雄足も得意としていたものである。

また雄足の場合、交易活動のこともあって、貯蓄用の稲というよりは、交易の代価としての米の利用が盛んであっ

Hosei University Repository

たが、これは長屋王家木簡にも言えることである。現存する木簡には「大御飯米」など米に関するものが多い。

天皇家の場合、令制官田についてみてみると、倭屯田の伝統を引く省営田では穎稲での収納が、一方国営田では舂米での納入が行なわれている（館野143―212以下）。穎稲での収納の方が前代以来の基本なのであろうが、日常的な場面では、米で動くことも多々あったのである。

その他、雄足の手元にあった「石山紙背文書」中にみえる海上国造他田日奉部直神護と長屋王家との関わりも興味深い問題であるが（大山170―37以下）、紙幅の都合もあり後考を俟ちたい。

おわりに

以上、近年、急速に研究が進展している長屋王家木簡をめぐる諸問題について、とくに所領を中心とした経済活動に焦点を絞って、いくつかの論点の整理を試みた。現在の研究水準を示したにすぎないもので、まだ不十分な状態であるが、今後の研究の進展の捨石となれば幸いである。

長屋王家木簡からは、これまで律令制の規定からはみえてこなかった、律令制の背後にある様々な私的な経済基盤が明らかになったことが、この分野では最大の収穫であったように思われる。また律令的な給付地であっても、その運用はあるいはかなり古いものであった可能性もある。我々はあらためて、とくに律令制初期における非律令的なるものの存在に驚かざるを得ない。

《註》

（1）鬼頭129―63は、後掲の「長屋王家木簡関連論著目録（稿）」の129番の鬼頭氏論文の63頁を示す。以下同様。

（2）研究史の詳細については森222―365以下参照。森氏は、いずれの本主をも長屋王とみ、片方は父高市皇子から引き継いだもの（北宮王家）としている。

（3）大山170―181では、その家政機関を氷高内親王家のものとする立場から、山背を吉備内親王ではなく、氷高内親王家に引

Hosei University Repository

きつけて考えている。

(4) 角林氏は園の定義を唐律に即して考察しているが、氏自身認めているように、唐律とは異なり、事実として御田で蔬菜が作るれているわけで、その説明が欠けている以上、今直ちに氏説に同意するわけにはいかない。

(5) 『平城京木簡』一（奈良国立文化財研究所、一九九五年）一四四号木簡には「（賈ヵ）田」とみえるのが注目される。また澤田245—539参照。

(6) 『平城京長屋王邸宅と木簡』（吉川弘文館、一九九一年）五八号木簡。

この木簡にみえる倉について、「大御飯米倉」とされるのが普通であるが（角林136—2、館野143—196他）、これについては他の解釈も可能であろう。正倉院文書等では米と稲とは厳密に区別されており、貯蔵のため倉については、米ではなく稲と関係するのが普通であろう。米と倉とは可能ならば、区切って読みたいところである。とすれば「御田にて大御飯米を苅り竟る。倉に古稲を移すに依て、収むるをえず」と読むこともできるように思われる。こう解釈すると、倉をめぐる角林136—3の議論については、再考が必要となるものと思われる。

(7) 角林136—3では、位田・職田であることを前提にして議論を進めているが、その根拠は「令の規定にもとずいて考えれば」であり、再検討する必要があろう。

(8) 和田萃「殯の基礎的考察」（『史林』五二—五、一九六九年、後に同『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上所収）では、木上を明日香村大字飛鳥小字木部に比定している。

(9) 中央豪族の地方における出挙経営の実例としては、国造豊足によるものが著名である。拙稿「安都雄足の私田経営—八世紀における農業経営の一形態—」（『史学雑誌』九六—六、一九八七年）他参照。

(10) 藤間生大『日本庄園史』（近藤書店、一九四七年）、拙稿「九世紀に於ける『畿内型』初期庄園の経営構造—近江国愛（依）智庄を事例として—」（『ヒストリア』一一九、一九八八年）他。

(11) 竹内理三「八世紀に於ける大伴的と藤原的—大土地所有の進展をめぐって—」（『史淵』五二、一九五二年、後に『律令制と貴族政権』I所収）、大津透『律令国家支配構造の研究』（岩波書店、一九九三年）他。また鬼頭氏が述べる八世紀の貴族の二面性・両貫性（鬼頭157—146）も同様の意味であろう。

(12) 例えば土田直鎮・永井路子・早川庄八「座談会　律令と日本人」（『日本の歴史月報』四（小学館、一九七四年）等。

(13) 研究史等を含めて、註(10)前掲拙稿参照。

〔付記〕本稿は、一九九六年度法政大学特別研究助成金「長屋王関係史料の集成とその政治史的分析」による研究成果の一部である。

長屋王家木簡関連論著目録（稿）

1997年10月現在

	執筆者	論文名	掲載誌等	巻号	特集	刊行年月	出版社	索目録	所収・再録書名
1	西尾 連	長屋王と藤原氏	地理と歴史	6-3		1934/03		○×	
2	川瀬一馬	長屋王の願経	『奈良叢記』			1942/01		×	日本書誌学之研究
3	川崎庸之	長屋王時代-万葉集の周辺	短歌主潮	1-3		1948/11		○×	記紀万葉の世界 | 著作選集1
4	北山茂夫	長屋王-日本古代政治史のための断章	立命館文学	93		1953/02		○×	万葉の世紀
5	庄司 浩	「長屋王の変化」後日譚	日本歴史	59		1953/04		○×	
6	田中塊堂	大般若波羅蜜多経 和銅五年長屋王願経 | 大般若波羅蜜多経 神亀五年長屋王願経 | 長屋王（書人小伝）	『書道全集』	9	日本1 大和・奈良	1954/10	平凡社	○×	
7	直木孝次郎	長屋王の変について	続日本紀研究	3-6		1956/06		×	奈良時代史の諸問題
8	岸 俊男	光明立后の史的意義—古代における皇后の地位	ヒストリア	20		1957/10		×	日本古代政治史研究
9	岸 俊男	長屋王の死 | 光明子の立后	『新しい大和の歴史』 大和タイムス社編			1958/08	大和タイムス社	○×	
10	角田文衛	不比等の娘たち(1)(2)—初期律令政治運営の秘奥をめぐって	古代文化	12 4|5		1964/04|05		△×	律令国家の展開 | 著作集5
11	大村峯司	中衛府成立の史的背景(上)(下)—長屋王の変に関する一考察	政治経済史学	33|34		1965/10|11		○×	
12	角田文衛	竹野女王	『律令国家の展開』			1965/12	塙書房	△×	著作集5
13	犬養 孝	長屋王の変と万葉集	国文学 解釈と教材の研究	11-13		1966/11		○×	
14	古代史研究会	奈良朝政治史—長屋王を中心にして	国史談話会雑誌	11		1967/11		○×	
15	乾 一夫	長屋王時宴の疑問点	古典評論	3		1968/01		○×	
16	野村忠夫	長屋王首班体制から藤四子体制へ	『律令政治の諸様相』		（塙選書64）	1968/04	塙書房	×	
17	高橋 誠	「長屋王の銭貨政策」について	日本歴史	256		1969/09		○×	
18	笹山晴生	長屋王の変-藤原氏に対抗した皇親勢力	『日本と世界の歴史』	5	8世紀 平城京 唐とイスラム フランク王国	1970/02	学習研究社	○×	奈良の都 その光と影
19	田中多恵子	長屋王の変についての一考察	日本歴史	283		1971/12		○×	
20	米田雄介	長屋王の変 | 天皇親衛軍の編成	『日本の歴史』	3	奈良の都	1973/05	研秀出版	○×	

Hosei University Repository

21	堀池春峰	長屋王—謀略にたおれた天武の嫡流	『人物探訪・日本の歴史』	2	王朝の貴族	1975/05	暁教育図書	○×	
22	阿蘇瑞枝	長屋王の変	『古代史を彩る万葉の人々』 上代文学会編			1975/06	笠間書院	○×	
23	栗原治夫	大般若経（長屋王願経）	『書の日本史』	1		1975/07	平凡社	○×	
24	高野正美	「古万葉」と長屋王派	上代文学	37		1976/04		○×	
25	長野　正	無念の反逆—長屋王・広嗣・奈良麻呂	『人物群像・日本の歴史』	3	天平の開花	1977/02	学習研究社	○×	
26	木本好信	長屋王政治の一考察—神亀四年三月の官人処遇について	史聚	5•6		1977/07		○×	藤原仲麻呂政権の研究 奈良朝政治と皇位継承
27	中川　收	長屋王首班体制とその政治	国史学	103		1977/10		○×	奈良朝政治史の研究
28	粂川光樹	大伴旅人と長屋王	国文学 解釈と教材の研究	23-5		1978/04		○×	
29	岡部伊都子	長屋王と吉備内親王—光明子立后のかげに	『日本女性の歴史』	2	輝ける女帝と后	1978/08	暁教育図書	○×	
30	犬飼公之	長屋王の追悼—万葉集巻六、第一部	上代文学	41		1978/11		○×	
31	宮城洋一郎	律令政権における仏教—長屋王政権の特質	『日本仏教史研究』 三枝慶香編	1	国家と仏教	1979/06	永田文昌堂	○×	
32	岸　俊男	"鴨"雑考	『橿原考古学研究所論集』 橿原考古学研究所編	第五	創立四十周年記念	1979/09	吉川弘文館	×	日本古代文物の研究
33	井上　薫	都祁の氷池と氷室	ヒストリア	85		1979/12		×	
34	大井重二郎	佐保の内の万葉歌人—文学のサロンとその政治的背景	『萬葉・その後』 犬養孝博士古稀記念論集			1980/05	塙書房	○×	
35	中川　收	長屋王の政治とその終焉	歴史読本	25-14		1980/11		○×	
36	北村　進	長屋王の変と小野老	上代文学	50		1983/04		○×	
37	松尾　光	日本霊異記と長屋王	翔	9		1983/04		○×	
38	金井清一	長屋王と藤原不比等—赤人登場の背景	日本文学	33-5	古代王権と文学	1984/05		○×	
39	吉井　巌	高市皇子と長屋王	『エコール・ド・ロイヤル 古代日本を考える』	7	古代日本の人間像（Ⅲ）	1985/11	学生社	○×	
40	新川登亀男	奈良時代の道教と仏教—長屋王の世界観	『論集日本仏教史』 速水　侑編	2	奈良時代	1986/03	雄山閣出版	×	
41	綾村　宏	出土木簡についての検討	『平城京左京三条二坊六三坪発掘調査報告』			1986/06	奈文研	×	
42	松尾　光	『日本霊異記』の長屋王と行基	呴沫集	5		1987/03		○×	

Hosei University Repository

43	青木和夫	長屋王の邸の跡	中央公論			1988/03			
44	根本誠二	長屋王と仏教	『日本宗教史論叢』 下出積與編			1988/05	桜楓社	○	
45	直木孝次郎	長屋王の生涯	奈良県観光	378		1988/05		○	
46	東野治之	長屋王家の木簡—古代の文字資料から(7)	出版ダイジェスト	1277		1988/12		○	書の古代史
47	金子裕之	長屋王は左道を学んだか	歴史読本	33-24	古代天皇家と宗教の謎	1988/12			
48	綾村　宏	長屋王家木簡	朝日新聞			1988/12/19			
49	館野和己	長屋王家の木簡	『古代史復元』	8	古代の宮殿と寺院	1989/01	講談社		
50	平野邦雄	長屋王宮と平城京	文化庁月報	244		1989/01			
51	志田諄一	「長屋親王」木簡をめぐって	常総の歴史	3		1989/01			
52	野村忠夫	己巳年雑考	日本歴史	488		1989/01		○	古代貴族と地方豪族
53	永井路子	永井路子のよみがえる万葉人1 悲劇のプリンス長屋王	読売新聞			1989/01/08			よみがえる万葉人
54	寺崎保広	長屋王家木簡の出土	日本文化財科学会会報	17		1989/02			
55	東野治之	『続日本紀』と木簡	新日本古典文学大系月報	3		1989/03			
56	奈良公俊	長屋王首班体制の成立と〈赤人派〉の関係について—赤人論のために	成蹊国文	22		1989/03			
57	松原弘宣	「津税使」について	続日本紀研究	261		1989/03			
58	木本好信	長屋王と政権の実体	米沢史学	5		1989/03		△	奈良朝政治と皇位継承
59	金子裕之	平城京長屋王邸跡	『世界大百科事典』百科年鑑	'89		1989/04	平凡社		
60	長屋清臣	長屋皇宮と作宝楼—『懐風藻』が指し示す作宝楼の所在地と完成年代	東アジアの古代文化	59		1989/04			
61	綾村　宏	平城宮跡・平城京跡出土の木簡	奈良国立文化財研究所年報	1988		1989/04			
62	直木孝次郎	長屋王木簡の出現とその意味	明日香風	30		1989/04		○	
63	虎尾俊哉	長屋王を親王ということ	歴博友の会ニュース	23		1989/04		○	紫叢古稀雑録
64	加藤　優	「長屋王家木簡」の発見	書道研究	3-5		1989/05			
65	駒井鼎静	「長屋王家木簡」の考察	書道研究	3-5		1989/05			

Hosei University Repository

66	寺崎保広	左京三条二坊一・二・七・八坪の調査　木簡	『昭和六十三年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』			1989/06	奈文研		
67	森　公章	長屋王邸の発掘	歴史と地理	406		1989/06			
68	寺崎保広	長屋王家木簡の発掘	特別展「再現された奈良の都　平城京展」講演会記録			1989/07/02			
69	永井路子	異議あり！長屋王邸	別冊文芸春秋	188		1989/07		△	異議あり日本史（文春文庫版）
70	大山誠一	長屋王の生涯	駿台フォーラム	7|8|10		1989/07 90/07 92/07			
71	寺崎保広	奈良時代の貴族生活	月刊奈良	29-8		1989/08			
72	門脇禎二	木簡―古代の京都と長屋王木簡群	文化財報	66		1989/08	京都府文化財保護基金		古代の道教と朝鮮文化
73	木本好信	『万葉集』巻三・二九九～三〇二番歌について	国学院雑誌	90-8		1989/08		○	大伴旅人・家持とその時代
74	鬼頭清明	女帝の館の婚姻・長屋王（古代漂流8）	朝日新聞夕刊（大阪）			1989/08/25		○	古代史を語る
75	町田　章	長屋王家の権力と財力	月刊 Asahi			1989/09			
76	杉本苑子	長屋王と邸跡出土の木簡	史窓余話	10		1989/09		○	
77	東野治之	長屋王家木簡の書風―古代の文字資料から(9)	出版ダイジェスト	1308		1989/09			書の古代史
78	東野治之	古文書・古写経・木簡	水茎	7		1989/09			遣唐使と正倉院―書の古代史
79	松尾　光	政界の巨星・長屋王の想像を超える権勢	『古代史はこう書き変えられる―検証・33の遺跡』 松尾　光編著			1989/11	立風書房	○	
80	直木孝次郎	長屋王邸出土木簡に関する二、三の考察	『日本の宗教と文化』 平松令三先生古稀記念論集			1989/11	同朋舎出版		
81	田辺征夫	長屋王邸宅跡	月刊文化財	314		1989/11			
82	大山誠一	所謂『長屋王家木簡』の再検討	木簡研究	11		1989/11			
83	寺崎保広	一九八八年出土の木簡―奈良・平城宮跡	木簡研究	11		1989/11			
84	木本好信	長屋王の年齢―甍去54歳・46歳説の検討	史聚	24		1989/12			大伴旅人・家持とその時代
85	山縣明人	天平元年段階における政治権力構造について―長屋王の変の分析を通じて	政治経済史学	284		1989/12			

Hosei University Repository

86	東野治之	古代人の日常文―長屋王家の木簡から	『歴史の読み方』週刊朝日百科日本の歴史	4	文献史料を読む・古代	1990/01	朝日新聞社		
87	寺崎保広	長屋王家の文書木簡	日本歴史	500	日本史上の人物と歴史	1990/01			
88	平野邦雄	都郡の氷室	角川日本地名大辞典月報	46		1990/02			
89	辰巳正明	はしがき｜長屋王とその時代｜高徳の侍み｜左道を学ぶ｜長屋王と作宝楼の文学｜あとがき	『長屋王とその時代』(叢刊・日本の文学9)			1990/02	新典社		万葉集と中国文学 第二
90	渡辺晃宏	くにはらをあるく37・38　長屋王の影	朝日新聞（奈良版）			1990/02/25・03/04			
91	綾村　宏	最近出土の木簡から	水茎	8		1990/03			
92	平　あゆみ	黄文王帝位継承企謀と橘奈良麻呂の変―長屋王皇統への可能性とその再挫折	政治経済史学	287		1990/03		○	
93	寺崎保広	長屋王家木簡	奈良国立文化財研究所年報	1989		1990/03			
94	森田　悌	北宮木簡―謂ゆる長屋王家木簡について	東アジアの古代文化	63		1990/04			古代国家と万葉集
95	鬼頭清明	長屋王家木簡二題―赤染鳳鳴と竹野女王	白山史学	26		1990/04			古代木簡の基礎的研究
96	森田　悌	北家牒にみえる家令	日本歴史	505		1990/06			古代国家と万葉集
97	森　公章	長屋王の変―「左道」密告事件	別冊歴史読本	15-16		1990/07			
98	金子裕之	絵馬と猿の絵皿―長屋王邸の調査から	『環シナ海文化と古代日本―道教とその周辺―』千田　稔編			1990/10	人文書院	○	
99	佐藤　信	長屋王	別冊歴史読本	15-24	日本歴史「伝記」総覧	1990/10			
100	佐藤　信	奈良の都と貴族社会	『古文書の語る日本史』	1	飛鳥・奈良	1990/11	筑摩書房		日本古代の宮都と木簡
101	東野治之	平城京跡	『日本古代木簡選』木簡学会編			1990/11	岩波書店		
102	澤田　浩	『薬師寺縁起』所引天武系皇親系図について	国史学	142		1990/11			
103	荒井秀規	古代相模の「渡来人」と「帰化人」	三浦古文化	48		1990/11		○	
104	渡辺晃宏	一九八九年出土の木簡―奈良・平城京跡	木簡研究	12		1990/11			
105	綾村　宏	木簡が語る長屋王家（長屋王とその時代）	『平城京長屋王邸宅と木簡』奈良国立文化財研究所編			1991/01	吉川弘文館		

Hosei University Repository

106	小池伸彦	長屋王邸宅の発見（出土とした遺物　金属製品・土製品・石製品ほか｜木製品）｜長屋王邸宅の復元（長屋王邸宅の日常生活　身につけたアクセサリー｜飼っていた動物｜室内の調度｜日々の信仰）｜二条大路木簡の発見（五坪の建物と二条大路の移り変り｜出土した遺物　金属製品・土製品・石製品｜銅製品｜木製品｜絵馬）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
107	小林謙一	長屋王邸宅の発見（出土とした遺物　瓦）｜長屋王邸宅の復元（長屋王邸宅の屋根瓦）｜二条大路木簡の発見（出土した遺物　瓦）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
108	島田敬男	長屋王邸宅の発見（建物の移り変り）｜長屋王邸宅の復元（長屋王邸宅の住まい）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
109	田辺征夫	長屋王邸宅の発見（調査のいきさつ｜長屋王家木簡の発見）｜まとめ	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
110	玉田芳英	長屋王邸宅の発見（出土とした遺物　土器｜鎮の墨画土器｜さまざまな硯）｜長屋王邸宅の復元（長屋王邸宅の日常生活　食事と食器）｜二条大路木簡の発見（出土した遺物　土器）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
111	寺崎保広	長屋王邸宅の発見（出土した遺物　長屋王家木簡）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
112	本中　真	長屋王邸宅の発見（道路と敷地）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
113	森　公章	長屋王邸宅の発見（都祁氷室）｜木簡が語る長屋王家（長屋王邸宅の住人と家政機関）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
114	渡辺晃宏	木簡が語る長屋王家（長屋王家の経済基盤）｜二条大路木簡の発見（二条大路木簡の内容）	『平城京長屋王邸宅と木簡』			1991/01	吉川弘文館		
115	鬼頭清明	木簡と遺跡―平城京二条大路木簡をめぐって	吉川弘文館の新刊	36		1991/01		○	
116	東野治之	北家と北宮―森田悌氏の研究に接して	日本歴史	512		1991/01			長屋王家木簡の研究
117	奈良国立文化財研究所	はじめに｜長屋王邸の発見｜長屋王家木簡物語｜長屋王とその時代｜藤原氏の台頭	『長屋王「光と影」展―長屋親王宮の発見―』			1991/02	日本経済新聞社大阪本社		
118	井上　薫	竹渓の山は冲冲	日本歴史	513		1991/02		△	
119	館野和己	長屋王と藤原氏―木簡が語る奈良朝政治史	摂陵	116		1991/03			
120	山崎正伸	「北宮」語義考―大中臣頼基集詞書「北宮」を巡って	文学・語学	129		1991/03			
121	勝浦令子	木簡からみた北宮写経	史論	44		1991/03			

Hosei University Repository

122	鎌田元一	郷里制の施行と霊亀元年式	『古代の日本と東アジア』上田正昭編			1991/05	小学館		
123	栄原永遠男	藤原光明子と大般若経書写―「写経料紙帳」について	『古代の日本と東アジア』			1991/05	小学館		
124	野田嶺志	律令国家の戒厳令	『古代の日本と東アジア』			1991/05	小学館		
125	東野治之	長屋王家木簡の文体と用語	『万葉集研究』	18		1991/05	塙書房		長屋王家木簡の研究
126	増尾伸一郎	〈君が手馴れの琴〉考―長屋王の変前後の文人貴族と嵇康	史潮	新29		1991/06			万葉歌人と中国思想
127	中川　收	長屋王とその王子たち	政治経済史学	300		1991/06			
128	小島憲之	『竹渓の山は冲冲』統貂	万葉	139		1991/07			
129	鬼頭清明	平城京の保存と長屋王木簡―東院南方遺跡の保存を考える	『遺跡が消える　研究と保存運動の現場から』歴史学研究会編			1991/09	青木書店		
130	寺内　浩	下級官人とその出身地―長屋王家木簡	『新版古代の日本』町田　章―鬼頭清明編	6	近畿Ⅱ	1991/09	角川書店		
131	森田　悌	北家・北宮と家政機関	日本歴史	520		1991/09			
132	館野和己	文書木簡の研究課題―長屋王家木簡を中心に	考古学ジャーナル	339		1991/11			
133	森　公章	荷札木簡の研究課題	考古学ジャーナル	339		1991/11			
134	寺崎保広	「若翁」木簡小考	奈良古代史論集	2		1991/11			
135	渡辺晃宏	長屋王家木簡と二つの家政機関―伝票木簡の考察から	奈良古代史論集	2		1991/11			
136	角林文雄	長屋王家経済関係木簡考証	続日本紀研究	277		1991/12			
137	福原栄太郎	長屋王家形成についての基礎的考察	続日本紀研究	277		1991/12			
138	綾村　宏	「長屋王家木簡」その前後	書道研究	5-6		1992/01			
139	長屋清臣	長屋王の隠し文	東アジアの古代文化	70		1992/01		○	
140	八木　充	「長屋王家木簡」と皇親家令所	日本史研究	353		1992/01			
141	高橋和弘	古代日本の氷室制度について―特に奈良時代における氷室制の再検討	山形大学史学論集	12		1992/02			
142	相原綾子	長屋王宅跡のいろいろ	古代文化史論攷	11		1992/03			
143	館野和己	畿内のミヤケ・ミタ	『新版古代の日本』山中一郎―狩野　久編	5	近畿Ⅰ	1992/03	角川書店		

Hosei University Repository

144	平石　充	「長屋王家木簡」にみえる家政機関―研究動向を中心に	史学研究集録	17		1992/03			
145	仁藤敦史	スルガ国造とスルガ国	静岡市史研究	4		1992/03		△	
146	館野和己	長屋王家の食糧事情―木簡に見る古代貴族の食生活	摂陵	120		1992/03			
147	東野治之	長屋王家木簡の文書と家政機関	大阪大学教養部研究集録（人文・社会科学）	40		1992/03			長屋王家木簡の研究
148	田辺征夫	長屋王とその邸宅をめぐって	『地中からのメッセージ 平城京を掘る』			1992/05	吉川弘文館		
149	河名　勉	海上郡司を希望した他田日奉部神護	千葉史学	20		1992/05		○	
150	金子裕之	長屋王邸および二条大路出土の木製品	平城宮跡発掘調査部発掘調査概報	1991年度		1992/06		○	
151	鎌田元一	郷里制の施行　補論	『長岡京古文化論叢』中山修一先生喜寿記念事業会編	II		1992/07	三星出版		
152	鬼頭清明	太政官厨家跡と地子の荷札	『長岡京古文化論叢』	II		1992/07	三星出版		
153	森田　悌	貴族家の考察―初期律令国家理解への一視角（五）	金沢大学教育学部教科教育研究	28		1992/07			
154	松尾　光	地中文字の証言①～㉔	産経新聞			1992/07/22-12/09		○	天平の木簡と文化
155	中西康裕	藤原北家と「左大臣家」	続日本紀研究	281		1992/08			
156	小泉　道	日本霊異記と続日本紀	万葉	144		1992/09			
157	鬼頭清明	万葉人の生活―長屋王邸出土木簡をめぐって	『和歌文学講座』	2	万葉集 I	1992/09	勉誠社		
158	森　公章	よみがえる平城京30奈良時代のＩＤカード	むれしか	398		1992/10			
159	森田　悌	北宮と長屋王	東アジアの古代文化	73		1992/10			
160	金子裕之	長屋王邸跡	『考古学の世界―古代を拡大する』	3	近畿	1992/11	ぎょうせい	○	
161	山中　章	長屋王邸・長岡京東院・鳥羽離宮・山田寺・水落遺跡	『考古学の世界―古代を拡大する』	3	近畿	1992/11	ぎょうせい	○	
162	館野和己	長屋王家木簡の舞台	『日本史における国家と社会』宮川秀一編			1992/11	思文閣出版		
163	東野治之	長屋王家木簡からみた古代皇族の称号―中皇命と大皇	『日本史における国家と社会』			1992/11	思文閣出版		長屋王家木簡の研究

Hosei University Repository

164	八木　充	長屋王家と万葉歌	上代文学	69		1992/11			
165	大山誠一	藤原房前没後の北家と長屋王家木簡	日本歴史	534		1992/11		○	
166	岩本次郎	木上と片岡	木簡研究	14		1992/11			
167	森　公章	奈良の都のくらし6 奈良時代の医療事情	赤旗			1992/11/13			
168	鬼頭清明	長屋王家の謎	『古代宮都の日々』			1992/12	校倉書房		
169	東野治之	長屋王家と大伴家	続日本紀研究	283		1992/12			長屋王家木簡の研究
170	大山誠一	「長屋王家木簡」に見える家政機関｜氷高内親王をめぐる諸問題｜長屋王と吉備内親王	『長屋王家木簡と奈良朝政治史』			1993/01	吉川弘文館	△	
171	早川庄八	「長屋親王宮」木簡を読む	『続日本紀（古典講読シリーズ）』岩波セミナーブックス 109			1993/02	岩波書店		
172	森田　悌	北宮と奈良務所	金沢大学教育学部紀要（人文科学・社会科学編）	42		1993/02			
173	山中　章	古代都城の考古学	『考古学　その見方と解釈』森　浩一編	下		1993/03	筑摩書房		
174	渋谷啓一	「長屋王家木簡」関係人名索引（稿）	史学論叢	12		1993/03			
175	青葉　高	野菜の種類名と渡来年代	VESTA	15		1993/04		△	
176	東野治之	日本語論一漢字・漢文の受容と展開	『新版古代の日本』坪井清足｜平野邦雄編	1	古代史総論	1993/04	角川書店		長屋王家木簡の研究
177	森　公章	卜部寸考一長屋王家木簡の中の一点から	日本歴史	539		1993/04			
178	大脇　潔	忘れられた寺一青木廃寺と高市皇子	『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集			1993/05	久保哲三先生追悼論文集刊行会		
179	寺崎保広	木簡論の展望一文書木簡と荷札木簡	『新版古代の日本』木下正史｜石上英一編	10	古代資料研究の方法	1993/07	角川書店		
180	森田　悌	長屋王の治政一初期律令国家理解への一視角（六）	金沢大学教育学部教科教育研究	29		1993/07		○	
181	荒井秀規	長屋王邸跡地出土の高座郡銘木簡について	神奈川県立博物館だより	26-2		1993/07			
182	大山誠一	長谷寺銅版法華説相図銘の年代と思想	『日本律令制論集』笹山晴生先生還暦記念会編	上		1993/09	吉川弘文館		
183	巻名宏昭	官人家の家政機関	『日本律令制論集』	上		1993/09	吉川弘文館		

Hosei University Repository

184	森田　悌	長屋王	歴史読本	38-18	日本史を変えた人物200人	1993/09		○	
185	大山誠一	「野中寺弥勒像」の年代について	弘前大学国史研究	95		1993/10		△	
186	高島正人	聖武朝初頭（長屋王首班期）の内政策	史正	22		1993/10		○	
187	大脇　潔	「朝風廃寺」の再発見	明日香風	48		1993/10			
188	松村恵司	長屋王邸出土の墨書土器（表紙解説）	月刊文化財	362		1993/11		○	
189	森　公章	平城宮跡の墨書土器	月刊文化財	362		1993/11			
190	佐藤　信	古代文字資料の現在	国語と国文学	70-11	文学とその周辺	1993/11			日本古代の宮都と木簡
191	神野清一	「長屋王家木簡」および「二条大路木簡」の奴婢	『日本古代奴婢の研究』			1993/12	名古屋大学出版会		
192	鬼頭清明	奈良の都⑥　長屋王の生活	『日本歴史館』			1993/12	小学館	○	
193	福原栄太郎	長屋王家木簡にみえる乳母について	神戸山手女子短期大学紀要	36		1993/12			
194	渡辺晃宏	大山誠一著『長屋王家木簡と奈良朝政治史』	日本歴史	548		1994/01			
195	佐藤　信	解説編｜総論編（文字資料としての木簡）｜木簡関係文献一覧	『上代木簡資料集成』			1994/02	(株)おうふう		日本古代の宮都と木簡
196	寺崎保広	日本木簡的特点与長屋王家木簡	考古与文物	1994年二期		1994/03			
197	森　公章	長屋王家木簡再考	弘前大学国史研究	96		1994/03			
198	寺崎保広	2万9千点　長屋王家木簡の削り屑	朝日新聞			1994/03/05			
199	神尾登喜子	長屋王伝承考―自死と鎮魂	『説話―救いとしての死』			1994/04	勉林書房	○	
200	吉川真司	勅符論	『古代・中世の政治と文化』井上清郎｜杉橋隆夫編			1994/04	思文閣出版		
201	仁藤敦史	伊豆国造と伊豆国の成立	『古代国家と東国社会』千葉歴史学会編			1994/04	高科書店		
202	森田　悌	木簡は語る｜北宮木簡の世界｜奈良時代初期の宮廷政治｜佐保の詩宴｜長屋王の謀反｜あとがき	『長屋王の謎―北宮木簡は語る』			1994/04	河出書房新社		
203	山口　博	奈良朝政治事件と東北アジアの国際環境	『東北アジア史の再発見―歴史像の共有を求めて』環日本海叢書3（古辰忠夫編）			1994/05	有信堂	○	
204	山口　博	ワン・ピラミッド・クライマーの官僚たち	『王朝貴族物語』講談社現代新書1208			1994/06	講談社		

Hosei University Repository

205	土橋　寛	持統天皇と藤原不比等の盟約	『持統天皇と藤原不比等―日本古代史を規定した盟約』中公新書1192			1994/06	中央公論社	△	
206	辰巳正明	悲劇の宰相、長屋王｜長屋王内縁の系譜｜危険思想「左道」とは何か｜藤原氏門流の政治と文学｜作宝楼の文学	『悲劇の宰相長屋王―古代の文学とサロンと政治』			1994/06	講談社		
207	井山温子	古代の「家」とその継承―長屋王家と藤原「家」の場合	政治経済史学	338		1994/08		△	
208	麻野絵里佳	奈良時代における畿外出身女孺に関する一考察	史観	131		1994/09			
209	松尾　光	木簡に見る長屋王の栄光と悲劇	『天平の木簡と文化』			1994/10	笠間書院	○	
210	井実充史	「於長王宅宴新羅客」詩の論	上代文学	73		1994/11		○	
211	石川千恵子	長屋王と「宗形」木簡	日本歴史	558		1994/11			
212	請田正幸	皇太子の子の蔡叔	『続日本紀の時代』続日本紀研究会編			1994/12	塙書房		
213	水野柳太郎	皇子命宮について	『続日本紀の時代』			1994/12	塙書房		
214	文珠正子	女竪考	『続日本紀の時代』			1994/12	塙書房	△	
215	大山誠一	再び「長谷寺銅版法華説相図銘」について―片岡直樹氏の批判に接して	仏教芸術	218		1995/01			
216	宮川　久	養老律令施行と「告密」―奈良期における長屋王に対する評価について	立教日本史論集	6		1995/01		○	
217	関西学院大学古代史研究会	長屋王家木簡索引（その1）～（その7）	続日本紀研究	293～299		1995/01-09			
218	寺崎保広	古代都市論	『岩波講座日本通史』	5	古代4	1995/02	岩波書店		
219	平石　充	八世紀における貴族の家政機関と国家―長屋王家木簡にみえるツカサ・トコロを中心に	国史学	154		1995/02			
220	松尾　光	治部省の役割と遣外使節の派遣をめぐって―古代日本外交の謎｜妻妾同居の謎、長屋王家の女人たち―古代の婚姻史	別冊歴史読本	20-5	日本古代史『謎』の最前線―発掘レポート	1995/02		○	天平の政治と争乱
221	寺崎保広	木簡（木簡出土遺構｜長屋王家木簡）	『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告―長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』	本文編		1995/03			
222	森　公章	長屋王邸の住人と家政運営	『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』	本文編		1995/03			

Hosei University Repository

223	渡辺晃宏	二条大路木簡｜二条大路木簡と皇后宮―二つの木簡群をめぐって	『平城京左京二条二坊・二条二坊発掘調査報告』	木文編		1995/03			
224	奈良国立文化財研究所	木簡出土の遺構｜長屋王家木簡の概要	『平城京木簡』	1	長屋王家木簡｜解説	1995/03	奈文研		
225	鶴見泰寿	長屋王家木簡と奈良宮務所	考古学論攷（橿原考古学研究所紀要）	19		1995/03			
226	東野治之	長屋王家木簡の醤・味滓請求文書―『葛氏方』との関連から	日本医史学雑誌	41-1		1995/03		○	長屋王家木簡の研究
227	福原栄太郎	長屋王家木簡にみえる木上について	日本歴史	562		1995/03			
228	栄原永遠男	北大家写経所と藤原北夫人発願一切経	『律令国家の政務と儀礼』 虎尾俊哉編			1995/07	吉川弘文館		
229	森　公章	橘家と恵美太家―奈良時代の貴族の家政断章	海南史学	33		1995/08			
230	館野和己	長屋王	『日本の歴史を解く100人』 吉村武彦｜池　享 吉田伸之｜原田敬一編			1995/09	文英堂		
231	松井　章	古代史のなかの犬	『文化財論叢』	II		1995/09	同朋舎出版		
232	寺崎保広	長屋王家木簡都名考証二題｜赤外線カメラによる木簡の解読	『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集	II		1995/09	同朋舎出版		
233	林　陸朗	天平期の藤原四兄弟	国史学	157		1995/10		○	
234	石川千恵子	高市皇子殯宮考―城上と木上	『日本古代国家の展開』 門脇禎二編	下		1995/11	思文閣出版		
235	櫛木謙周	古代の荘園における郡司の立場―文書形態からの一考察	『日本古代国家の展開』	下		1995/11	思文閣出版		
236	西野悠紀子	「長屋王家木簡」と女性労働	『日本古代国家の展開』	下		1995/11	思文閣出版		
237	上野　誠	香具山宮と城上宮―「殯宮之時」挽歌と殯宮設営地	万葉	155		1995/11			
238	佐藤　信	封緘木簡考	木簡研究	17		1995/11			日本古代の宮都と木簡
239	櫛木謙周	日本古代の「労働価値」基準	『日本古代労働力編成の研究』			1996/02	塙書房		
240	中西康裕	『続日本紀』と長屋王事件	続日本紀研究	300		1996/03			
241	佐藤　信	長屋王	『日本史重要人物101』 五味文彦編			1996/05	新書館		

Hosei University Repository

242	金子裕之	木簡は語る｜言葉の幸わうとき｜文字の魔力｜都のくらし、里のくらし	『歴史発掘』	12	木簡は語る	1996/05	講談社		
243	福原栄太郎	長屋王家木簡研究の現状と課題	情況	2-7-5	日本の古代をひらく	1996/05			
244	森　公章	長屋王邸宅跡	『国史大辞典』	15上	補遺	1996/06	吉川弘文館		
245	澤田　浩	七～八世紀における王臣家の“初期荘園”―藤原氏・大伴氏・他田宮大王系諸王族など	『日本古代の国家と祭儀』 林　陸朗｜鈴木靖民編			1996/07	雄山閣出版		
246	中川　收	長屋王の変をめぐる諸問題	『日本古代の国家と祭儀』			1996/07	雄山閣出版		
247	平石　充	税司に関する一考察	『日本古代の国家と祭儀』			1996/07	雄山閣出版		
248	東野治之	古事記と長屋王家木簡	『古事記研究大系』 古事記学会編	11	古事記の世界（上）	1996/09	高科書店	○	長屋王家木簡の研究
249	鬼頭清明	木簡と古代史｜長屋王家のしくみと生活	『木簡が語る古代史』 平野邦雄｜鈴木靖民編	上	都の変遷と暮らし	1996/09	吉川弘文館		
250	東野治之	木簡が語る古代の文化・生活	『木簡が語る古代史』	上	都の変遷と暮らし	1996/09	吉川弘文館		
251	森　公章	長屋王家木簡・長屋王邸関連論文目録（稿）	続日本紀研究	304		1996/10			
252	井内誠司	奈良国立文化財研究所編『平城京木簡一―長屋王家木簡一―』	歴史学研究	689		1996/10		○	
253	森　公章	長屋王家木簡三題	木簡研究	18		1996/11		○	
254	中川　收	橘三千代と長屋王の変	『奈良平安時代史の諸相』 史聚会編			1997/02	高科書店	○	
255	森　公章	王臣家と馬―長屋王家木簡の馬司の考察から	『奈良平安時代史の諸相』			1997/02	高科書店		
256	森　公章	「故京職宅返抄」を含む天平宝字八年の造東大寺司職の読み方	日本歴史	585		1997/02		○	
257	丸山顕徳	『日本霊異記』長屋王説話の民俗的性格	『古代の日本と渡来の文化』 上田正昭編			1997/04	学生社	○	
258	亀谷弘明	古代の封戸と交通―「長屋王家木簡」の分析から	古代交通研究	6		1997/06		○	
259	井内誠司	奈良国立文化財研究所編『平城京　長屋王邸跡―左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』	歴史学研究	699		1997/07		○	

※森251をもとに、それ以後のものも含めて森251と同一基準であらためて作成した。基礎となるデータは、小口編『日本古代史関係研究文献目録データベース』（MS-DOS版）であるが、紙幅の都合で、各論文ともそのデータのすべては載せていない。詳細は当該データベースを参照されたい。http://www.fujimi.hosei.ac.jp/~oguchim/で公開予定。
※森目録の欄の記号の意味は以下の通りである。
○森251にないもの　×長屋王家木簡発見以前のもの　△森251のデータを訂正したもの（副題増補のみの分は除く）

Hosei University Repository